
ケラケラ虫

岩槻大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケラケラ虫

【Nコード】

N8286F

【作者名】

岩槻大介

【あらすじ】

疲弊するこの国の経済状況とサービス残業に明け暮れるサラリーマンの悲哀を、自立する子供の目でシニカルに描いたお話です。

いち

めくらやなぎの葉がさわぎだす。太陽がしずみ終わった合図だ。もう、目は開いていても閉じていても同じ。風景は見るものから聞くものへと変わる。

——耳さえあれば、生きてるって分かるんだ。

2がうんと小さかったころ、1はよくそう言ってせなかを動かした。2の鼻や首筋が1のあったかいせなかにこすられて、くすぐったい音を発した。

聞こえる。月も星もことばもない。

夜は、音だ。

1は最近帰りがおそい。

やみの中でうずくまって2はじつと1の帰りをまつ。そのうちにうずくまっていたことさえもわすれてしまう。少しだけ体重を移動してみる。左足の下で小さな枯れ枝が音を立てる。そして、すぐきえる。遠くで水のながれる音がする。湿地帯よりもずっと遠く。

ううん、じっさいにはうんと近い場所なのかもしれない。でも、聞こえているのが耳よりもずっと遠い、べつの器官のような気がする。

2は分かっている。本当は何も聞こえていない。

音なんて、どこにもないんだ。

今日のゆうがた、2は飛ぶ練習をした。

さびた四角い缶の上から足をそろえて何度もジャンプした。太陽がオレンジ色の平べったいかたまりになったころ、冷気をふくんだ紫色の風が2のひたいをなめた。そろそろだよ、風は言った。

最近じゃない。いつからだろう。

2はいっしょうけんめい思い出そうとした。最近なんかじゃない。いつからだ？　いつから、1の帰りが遅くなったんだっけ。

に

1はまいにちケラケラ虫を捕りにいく。

朝早くうちを出て、一日じゅうさがす。ケラケラ虫を食べて1も2も生きている。

ケラケラ虫は湿地帯にせいそくしている。せなかのもり上がったオスがいちばんおいしい。でも最近、数がすくなくなった。おくに入ればもつというはずだ、と1は言う。湿地帯のおくは危険だ。それは2も知っている。

1は足をひきずって夜おそくに帰ってくる。ため息。2はうずくまったりと、そんな1の音を聞く。そしてやみの中に手をのばす。1にさわろうと、手をのばす。でも、のばした手とはぎゃくの方から1の寝息がしずかに聞こえはじめる。これが本当の音だ。2はゆっくりと、ゆっくりと、やみがふくらんでいくのを見届ける。

2がうんと小さかったころ、1はいつも太陽は平べったくなる前に帰ってきて、大きくひらいた2の口の中にケラケラ虫をほうり込んでくれた。するどく上がった口で、せなかのもり上がったオスばかりをえらんでほうり込んでくれた。そして太陽がしずみ終わるまでいっぱい遊んでくれた。まだ歩くこともじょうずにできなかった2を、1はいつもひろい上げるような、すくい上げるような目で見ていた。

1のからだの色。地を這う草の色。風の色。空の色。それらぜん

ぶが、2にとっての世界だった。生きてるって分かる、うれしさと怖さだった。

夜になると1はずっと音を聞かせてくれた。

2は1のせなかに小さな耳をおしあてて、イノチの音を聞きながら眠りについた。1のせなかは、じぶんの顔が笑っていることをちゃんと感じさせてくれる、夢の入り口だった。

さん

2はまだ飛べないので、湿地帯に行ったことがない。だからケラケラ虫がどのようにせいそくしているのか知らない。2は知りたかった。そんな2の心とはうらはらに、ケラケラ虫は減っていくばかりだった。

そして今日、とうとう1は一匹も捕まえることができないまま帰ってきた。やみの中、羽根についたどろを口でおとしている音がしばらく聞こえた。2は1に話しかけることも、耳をせなかにおしあてることができなかった。

2は思いだしていた。1の笑った顔を思いだしていた。きっと1は今笑っている。今日だめだったぶん、明日はいっぱい捕れるよ。そう思って笑っている。笑いながらどろを落としているんだ。2はだんだんおかしくなった。おかしくて、おかしくて、涙がでそうになった。

いつからだろう。1の帰りがおそくなったのは。
いつからなんだろう。

ある日2は缶のちかくで奇妙な形の木の実を見つけた。細長くて、まわりがみじかい毛でおおわれた、いいにおいのする木の実だった。2はいっぺんで気に入り、ねぐらまで転がして帰った。色はぜんぜ

んちがうけど、さわった感じが1のせなかに似ていた。

2は飛ぶ練習につかれると、その木の実によりかかってぼんやりと風をながめた。夜は木の実に耳をおしあてて眠り、おきるといつも抱いていた。そして枯れ枝の折れぐあいから1が帰ってきて寝たあとをかくにんして、どこかがかゆくなるような安心感にひたった。そう、安心した。2は毎朝安心した。1が帰ってこなくなる、そんな気がいつからかしていた。だから帰ってきたあとがあると、それだけで安心するのだった。

よん

あの日から、1が一匹も捕れずに帰ってきたあの日から、2はケラケラ虫を見ていない。だからなにも食べていない。もうこの場所ではくらせないんだ。生きていけないんだ。2は分かっていた。

それでも1は毎朝はやくに湿地帯へでかけて行った。もう何日、1の顔を見ていないだろう。2は考えた。目の表面が、ふとしたはずみではりさけそうになるのをじっとがまんしながら2は考えた。

そろそろだよ、風は言った。

雨ふりの朝、2は久しぶりに1を見た。さいごに見た時にくらべるとずいぶんやせていた。ケラケラ虫は、雨がやんだあと、じめんからいつせいに顔をだすしゅうせいがある。以前1が言っていた。きっと雨がやむのを1はまっているのだろう。2はなんだかうれしくなった。うれしくてうれしくて、いっぱい1に話しかけた。いや、話しかけることをいっぱい考えた。そして、このまま雨がやまなければいい、と思った。へいきだよ。なにも食べなくても、へいきなんだ。本当だよ。

雨が上がっても1はでかけなかった。

次の日も、その次の日も、1は2のそばでだまって目を開けたまま、一日じゅう寝転がっていた。2は思うぞんぶん1のせなかに耳をおしあてることができた。

ふたりは充実していた。

充実しながらしずかに、しずかに、やせていった。

――耳さえあれば、生きてるって分かるんだ。

夜、2はふと思った。誰だろう。生きているのは誰で、分かるのは誰なんだろう。1のせなかはあいかわらずふわふわであったかかった。2はそこによりそって、ねぐらの奥に転がった木の实をなめた。みじかい毛はところどころはげおちて、いつしかほそいつるがまきついていた。

ご

1は2が泣いてもおこらなかつた。それが以前とちがう点だと気付いたのは、風が紫色から緑色に変わったころだった。

そう。1は、どんなにわがままを言ってもけっしておこらなかつたが、泣いたときにだけすっごくおこった。だから2はずっと、いたいときもくやしいときもこわいときも泣くことができなかった。

でも、1はおこらなくなった。おかげで、2は最近好きなかだけ泣くことができる。

ねむれない夜はあおむけで1のせなかによりかかり、一晚じゅう泣いた。涙は1のせなかにこぼれるまえに、2の耳にながれおちる。ぐるぐるまわるんだ、と2は思った。目からあふれでて耳にながれ込み、また目にたまるんだ。だから永遠に1のせなかをぬらすことはない。1がおこることも、もうない。そして、笑うことも。

2は分かっていた。

ある日とつぜん、2は飛べるようになっていた。練習のせいではない。ただ自分が飛べないということを思い出したのが、どういうわけか空の中だったのだ。

空はあったかかった。太陽に近いせいだと2は思った。

小さい羽根をピンとのぼすと、風がどこへでもはこんでくれる。たけやぶをこえ、原っぱをこえると湿地帯が見えてきた。2は羽根のかくどを変え、低いエゴの木におりたった。なつくさの繁茂するぬれた地表がキラキラ光って、踊っているみたいだった。

かたい岩場にも、しめった黒土にも、かわいた砂の上にも1の足跡は見つからなかった。そのかわり、いたるところで何かが風にゆれていた。それは弱々しい動きながら、湿地ぜんたいをしずかにゆらしている。光の屈折にも似たその群れの正体は、気が遠くなるほどの数の、ケラケラ虫だった。

ろく

2は、はじめて見るそのこうけいに思わずたじろいだ。どうすればいいのかわからなかった。とにかく、1に知らせなきゃ。2はあわてて飛びたった。

今度は練習どおりに羽根を動かす。ぱたぱたぱたぱた。いっしゅうけんめい羽ばたく。ぱたぱたぱたぱた。生まれたばかりの風が、幼い速度をやさしくつつみ込む。

やがてねぐらが見えてくる。1のまるくなったせなかが見えてくる。2は1によびかけようと、いっぱい息をすい込んだ。その時、2は見た。1の顔がゆつくりとこつちを見上げて笑うのを。だそうとしていた声と息が、かんぜんに行き場をなくした。あつ。思わず心の中でさけんでしまった。涙だ。1の頬にはっきりと涙の線が通っている。それをむきだしにして、1は笑っている。だれも何もよ

せつけない、決心したかんぺきな笑顔だった。同時に2の視界のふちからさまざまな記憶があふれた。それらはいつもみたいに耳に入らず、ポタポタと大地にたれて世界でいちばんちいさな湿地帯をつくった。

もう、1のからだは木の実と区別がつかなかった。

2はすい込んだ息を遠くの場所に向かってはきだした。そして、せいっぱい羽根を広げて高くまい上がった。風によってどこまでもどこまでもまい上がった。

2は分かっていた。もう二度と、下を見ないということ。

いちばん最後のさよならまで、泣いちゃだめなんだということ。そしていつの日か、じぶんが1となることを。

空のてっぺんまでのぼった2は今、風が新しい帰り道まで運んでくれるのをじっと待っている。

そろそろだよ、風が言う。

〈おしまい〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286f/>

ケラケラ虫

2010年10月9日23時48分発行